

とらふ



2022年3月16日 NO.623

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会

東海教区委員会委員長 大島 昭人（桑名組善宗寺）

新型コロナウイルス感染症の流行がはじまって2年以上が経過いたしました。

これにより、私たちの生活や活動は大きな影響を受けました。多人数の集まりや飲食が制限されたり、長距離の移動はおろか外出そのものを控えることさえ求められることもありました。各ご寺院におかれましては、従来通りの寺院活動が出来ない状況となったことでしょう。また、門信徒の皆さまにおかれましても、ご法事やお聴聞がこれまで通りは出来なくなったことでしょう。

「今日はお参りが多かった」「今回は何人集まった」など、人数の多少が法要行事や研修会の大きな指標とされてきたことから、お寺や仏前という同一空間に「集まる」ことで、私たちの活動が成り立ってきたという面が大きいことがうかがえます。その「集まる」ことが今、ままたらなくなっているのです。教区や組の活動に至ってはより広範囲に渡るため、その影響は尚更であります。

しかし一方で、「あたりまえ」や「不要不急」とはどういうことなのかを考えさせられ、「従来通り」の在り方ということについて、改めて見つめ直す機縁となっていることも事実です。今は出来ないこと・今でも出来ること・逆に今しか出来ないこと。また、従来通りやらなければならないこと・従来通りやれないけれど別の方法で出来ること・従来通りやらなくてもよいこと。

さまざまな社会の変化に対応しつつ、変わる事のない阿弥陀さまのおはたらき、親鸞聖人のみ教えを伝え広める活動となるよう「御同朋の社会をめざす運動」を共に進めてまいりましょう。

Contents

東海教区委員会	P1
こころばなし	P2
特集①	P3～P5
特集②	P6～P7
声・お坊さんの書棚	P8



『親切はするんじゃない させて頂くんです』 加藤 秀人（海幡組願成寺）

龍谷短期大学を卒業し、小倉のお寺に就職しました。そのお寺はご法義が盛んで、年に8回法座を開いていました。1回の法座は3日から5日、昼・夜1座2席のお参りでした。他にも、各地区で講も開き、法話を聞かせて頂く機会がとて多いお寺でした。私は、そのお寺に14年間お世話になりました。

ある法話の中で、「親切はするんじゃない させて頂くんです」この言葉を一緒に5回言ってみましょうと言われたので、私も一緒に言いました。その言葉は今でも私の中で大切な言葉として味わっています。

一般的に「善い行いをしましょう。悪い行いは止めましょう。」と言いますが、私がする行為は相対する方によって善にもなり、悪にもなります。「私は悪い行いをした事が無い」と言われる方もいるかもしれません。親鸞聖人は『正像末和讃』の中に、「悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり 修善も雑毒なるゆゑに 虚仮の行とぞなづけたる」というご和讃と、「無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ」（註釈版聖典617項、96・97首）というご和讃を表してくださいました。



仏道を歩む者は、私が仏に成りたいと言う思いで行う行為は何処まで行っても、当てにならないものであり、一つも徳にはならず、却って阿弥陀様の邪魔になる行為でしかないので。その事を喩えて、「へびやサソリ」を出し、私は毒を内在する身である事を教えて下さいました。阿弥陀様のはたらきを聞き、私を知らせて頂く事は、私を救う阿弥陀様の大きなはたらきを知らせて頂く事なのです。それが「まことのころ」であり、「弥陀の回向の御名」である「南無阿弥陀仏」なのです。だからこそ、親鸞聖人はお念仏を喜んで共に歩まれた方なのです。私も皆様も共にお念仏を喜んで歩める身になれるよう、「仏法を聞く」事を継続させて頂きましよう。

その上で、「親切はするんじゃない させて頂くんです」という言葉を私なりに味あわせて頂くと、行為は同じであっても、気持ちが違うのではないのでしょうか。

私がしてあげたとなれば、それ相応の見返りを期待します。それが得られないと悲しい気持ちになったり、腹を立てたり、相手に要求したりします。また、「私がしてあげたから」と相手に言えば、相手はどんな思いになるのでしょうか。「有り難う」であったり、「助かった」という言葉であれば、嬉しいのですが、悲しい言葉や、反発の言葉は悲しい気持ちになるのではないのでしょうか。ですが、させて頂くという時の気持ちはその行為自体が有り難いのであり、それ以上に何かを求める事もありません。

お互いに、親切はさせて頂きましよう。

「連研」のための補助資料の紹介

新型コロナウイルス拡大により教区・組・寺院は教化活動に様々な影響を受けてきました。各組で開催されていた「連研（門徒推進員養成連続研修会）」も日程の変更や休止などに追い込まれました。こういう時だからこそ「連研ノート E の 12 の問い」を学び直す機会としていただきたいとの願いから、それぞれの問いに関して教区内の研修講師に執筆いただき、昨年 12 月までの約 1 年半にわたり「とうかい」紙上に『連研のススメ』と題して掲載してきました。今回は「連研」をすすめて行くため宗派（門信徒教化部）が作成した補助資料・教材を紹介します。

教区の連研部会などで出される「連研」に関する課題は様々で多岐にわたりますが以下の事項は各組に共通する課題となっています。

I 【「連研」の認知度アップと参加者の募集方法】 具体的な内容としては、教区内僧侶・門信徒の「連研」に対する認知度が低く、その結果として組として「連研」が開催できない。また開催していてもスタッフが限定され参加者の募集にも苦勞している、などです。

II 【「話し合い法座」を中心とした「連研」の運営方法】 具体的な内容としては、今まで「連研」に関わっていないので内容をよく知らない。開催する場合の運営方法がわからない。開催している場合でも、より良い「連研」にしていくための方法を知りたい。話し合い法座をどう進めていくか学びたい、などです。

III 【中央教修への参加奨励】 具体的には、「連研」を修了した方の「中央教修」への参加率が非常に低い。僧侶の多くは「中央教修」を体験していないのでその必要性や有用性がわからない、などです。

これらの課題は現在「連研」に取り組んでいる組・寺院だけでなく、これから取り組もうとしている未開催や休止している組・寺院の課題でもあります。これから紹介する各種の補助資料・教材は、そんな課題に少しでも応えるために 2018～2021 年度にかけて宗派（門信徒教化部）が作成したものです。

I 【「連研」の認知度アップと参加者の募集】のために

(1) パンフレット「れんけんに参加しませんか？」

「連研」にお誘いいただく時だけでなく、普段の法座などでもご門徒に配布し「連研」を知っていただくために利用ください。



パンフレット「れんけんに参加しませんか？」

(2) 映像資料「れんけんに行ってみよう」

映像は①勤式・作法編②教義編③話し合い法座編④総合編⑤スケジュール編の 5 部で構成しています。DVD 版に「れんけんチャンネル」として、門徒推進員や僧侶スタッフからのお誘いの映像が挿入されています。組や寺院の各種研修会や法座などで門信徒や僧侶に見ていただき、「連研」への参加奨励や「連研」を知っていただくために利用してください。全編を一度にではなく、一編ずつ見ていただいてもかまいません。



映像資料「連研に行ってみよう」

ウェブ版はご門徒宅でお誘いいただく時、タブレットとともにスマホやタブレットを利用し映像を見ながら説明する資料としても利用いただけます。



宗派ウェブサイト版

(3) 冊子「連研はじめてみませんか」

未開催・休止組の方、組としては開催しているが今まで縁がなかった方向けの冊子です。「連研」とは聞いたことはあるが内容が分からないという方に簡潔に内容を紹介しています。映像資料と併せてみていただくと「連研」の様子がお分かりいただけます。



冊子「連研はじめてみませんか」

Ⅱ【「話し合法座」を中心とした「連研」の運営方法】のために

(1)『「連研」のすすめ』は本願寺出版より販売中です。実際に「連研」に取り組むスタッフが執筆し、丁寧で示唆に富んだ内容になっています。「連研」に初めて取り組む方にも分かりやすいことをめざし、写真やイラストを多用しています。もちろんすでに「連研」にかかわっている方にも大切な情報が満載です。

◆第1章『なぜ「連研」なのか』では改めて連研・門徒推進員の意義を明らかにしています。

◆第2章『「連研」をはじめましょう〈ホップ・ステップ・ジャンプ〉』では豊富な具体例を示して、「連研」を始めるノウハウをお伝えしています。

◆第3章『話し合法座をすすめるために①』

◆第4章『話し合法座をすすめるために②』で、話し合法座の準備の仕方と取り組み方を「カウンセリング」「ファシリテーション」「傾聴」などを紹介しながら詳しく述べています。

◆第5章『「連研」をより充実したものにするために』では中央教修のすすめや各種資料・研修会などを紹介しています。



冊子『「連研」のすすめ』

(2) 映像資料「話し合い法座をすすめるために」
DVD 版・ウェブ版ともに◆問題提起・まとめ編
◆Q & A 編の 2 部で構成しています。

問題提起・まとめ編では「連研」の話し合い法座
での問題提起・まとめを中心に、大切なポイントを
絞ってお伝えしています。

Q & A 編では話し合いに臨むスタッフとしての
姿勢と進め方を解説しています。『連研ノート（改
訂版）』『スタッフノート（別冊）』、そして『「連研」
のすすめ』とあわせて視聴いただきたいと思いま
す。

「連研」に取り組む時、話し合い法座をスタッフ
がどのように進めて行くかが課題であり不安とな
ります。この映像と左記の教材を利用いただき、ス
タッフ研修会を開催するなどして少しでもより良
い「連研」をめざしていただければと思います。



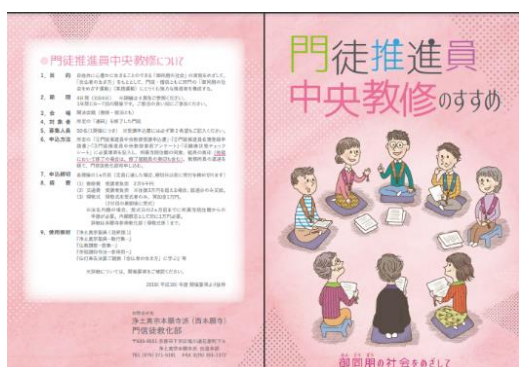
映像資料「話し合い法座をすすめるために」



2021(令和3)年3月作製
宗派公式ウェブサイト版

Ⅲ【中央教修への参加奨励】のために

パンフレット『門徒推進員中央教修のすすめ』、映像資料『門徒推進員中央教修』は、どちらも連研を修了し中央教修へ安心して参加いただけるようにとの願いで作られています。ただし今年度はコロナ禍のなかでしたのでウェブでの開催となりました。来年度以降もコロナ感染の状況により開催方法などが変わることもありますので、門信徒教化部に確認くださいますようお願いいたします。



パンフレット『門徒推進員中央教修のすすめ』



映像資料『門徒推進員中央教修』

紹介した補助資料は、どれも「連研」の現場を持つ僧侶スタッフが執筆・撮影・編集したものです。「連研」そして「連研」を通じた出逢いに育てられた体験を持つスタッフが、そのよろこびを多くの方に感じていただきたいとの思いでつくったとも言えます。教区内各組、各寺院の皆さまには、是非これらの補助資料に込められた願いを受けとめ活用いただくことをお願いいたします。

※本特集集中に紹介している冊子・パンフレットについては教区・組に配布し、
宗派公式ウェブサイトからダウンロード可能です。映像資料については、
DVD は教区・組に配布し、宗派公式ウェブサイトから視聴可能です。



「連研」・「中央研修」HP

オンライン座談会 第19期中央実習を終えて

第19期中央実習（2018年6月～2021年12月）を終えた皆さんに、実習を通しての学びや今後についてお話を伺いました。



ー中央実習に参加したきっかけは何でしたか？

正親 自坊に帰っても連研のことなどがわからず、組の先輩から「中央教修の見学に参加してみたら？」と声をかけていただき、見学者として参加しました。中央教修では参加されたスタッフ、ご門徒の一生懸命に取り組む姿が印象的でした。一方でスタッフとも参加者とも仲良くなりすぎ、皆さんの強い後押しで中央教修スタッフを養成する中央実習に参加することを宣言させられたことがきっかけです。

松原 自坊に6人の門徒推進員さんがいたのが大きいです。その人達が中央でどんな学びをされてきたのかに興味がありました。また年齢制限ぎりぎりでの最後の機会だったことや、布教使課程も終わるタイミングだったこともあり、行きたいなと思って参加しました。

麻布 父から行った方がいいよと言われたのがきっかけです。結婚が決まって、来年お寺に戻るというタイミングでの募集だったので、実感があまりなかったのですが参加してみようかと。最初は新婚旅行の翌々日からの実習だったり、他の実習生との熱意の違いを感じたりすることもありました。でも今は行ってよかったと思うしきっかけは何でもよいと思っています。

ー印象に残った学びについて聞かせてください。

松原 学ぶことは常々変化していることです。差別の学びについて、教区で聞いていたことはベースにあるのですが、ネットでの差別の実情は知らないことも多く、YouTubeのアクセス数を稼ぐビジネスにもなっていることは初めて知りました。またLGBTQ+についても、昔学んだときは性同一性障害とっていましたが、障害という概念で語ること自体が古いですねという講師からのお話に頷きました。

正親 知識のアップデートに関しては、僕も印象に残っています。今まで学んできたことが全部正しいのではなくて、その時代に応じて、柔軟性を持って認識していかなければならないと学びました。

内田 差別以外でもそうですが、体験者の声を聞くのはとても貴重な学びの場ですが、それに対しての向き合い方を教えてもらえたなと思いました。「聞けば自分にプラスになる」くらいに安易に考えていた自分があった。でも「体験者がそれを語る時は、また傷つくし、すごく力が要る作業なんです」と聞かせていただく中で、聞く側もそれ相応の向き合い方が必要だと気づかされました。

ー2 年目からは中央教修スタッフとして現場にも関わりますよね。何を感じましたか？

正親 熱心に取り組まれる受講生の門徒さんに接しながら、自坊にいる門徒推進員さんのことを思い出し、どんな思いで参加されたのかなと思いを巡らせました。スタッフ側の顔ぶれも回ごとに違うことによって、受講者の受け止め方や雰囲気も全く変わることを実感しました。

内田 初めて中央教修に参加したときに出会った受講者さんが記憶に残っています。ご高齢で高圧的な印象もあったのですが、話し合いのなかで徐々に変化され、最後にはびっくりするぐらいの変わりようでした。大きな変化を目の当たりにして、それだけ大切な場になるのだと思いました。

ーコロナ禍、オンラインでの受講になりましたが、どうでしたか？

松原 実習開始の頃はコロナは流行っていなかったもので、講義のあとに夜な夜な集まって話したり、関係のベースができていました。そこからのオンラインだったので、不便ではありましたが、腹の探り合いみたいなことはなかったです。もし20 期の皆さんが最初からオンラインで始めるとしたら、その点は心配します。

麻布 子どもが生まれて家庭環境が変わるタイミングだったこともあり、個人的にはオンラインになったことで比較的負担なく参加できたという面があります。ただ画面越しでは、言えるものも言えなかったりします。私も講義後の休憩時間のちょっとした雑談の中での深まりが大切だったと思います。



ーこれからの歩みと 20 期受講生に向けてのメッセージをお願いします！

麻布 今後は組連研にも関わっていきたいと思っています。研修による学びは人間性を作っていくと思うので、これからも学び続けていきたいと思っています。20 期受講を迷っている人があれば、まずは行ってみて、体験してみてもわかることがあると思います。



内田 これからも組の連研で頑張りたいです。連研は、門徒さんに死後のことではなく、今とか生活に関わることとしてみ教えを考えてもらえる場だと思うので。実習はここでしかできない勉強ができる場所だと思っています。いいことばかりではないかもしれないけれど、それも含めて大きな学びの場だったなど。体力や時間に余裕のある若いときに行く方がいいと私は感じました。



松原 これからも差別問題に自分から関わっていきたいと思いました。講義中に出てきた差別問題と非戦平和のつながりは考えたことがなく、これから学びを深めたいテーマです。今後はオンラインになる場面も増えていくのではと想像するので、コミュニケーションをどう取っていくかが大事になると思います。

正親 一人でできることって限られていると思うので、同じ志を持った仲間が近くにいてくれることを心強く感じています。私自身ここでの学びをこれからも大切にできればと思っています。受けられるタイミングが整わない事もあるので、少しでも迷うのであれば受けてみるのも良いかもしれません。

2022 年 6 月より第 20 期中央実習が開催されます。中央実習に興味を持たれた方、詳しく知りたい方は教区担当（梅山）までお問い合わせください。

『外国に行きたい』

コロナ禍で我慢していることが一つある。
それは外国を旅することだ。

大学時代長期休みになると大きなリュック
を担いで、いろんな国に出かけた。特に行く場
所にこだわりはない。ただそこに人がいればい
いのだ。何故か。常識を破壊しに行くのである。

タイ人の友達に聞いてみた。なんでバイクに
乗るのにヘルメットしないの？答えは、「格好
悪いから。」もちろん安全の為にヘルメットは
したほうがいい。でも、確かに格好良くないの
も多い。特に日本の中学の自転車登下校用のヘ
ルメットは安全の為に、進んで被りたい
とは思えなかった。

アイルランド人の女の子は髪の毛をピンク
と緑で染めており、耳と鼻にピアスをしてい
た。保育士をしているという。

「保育するのに格好は関係ないよ。」日本で
は校則のある学校が多い。茶髪にはしてはいけ
ない。ピアスを開けてはいけない。でも、本来学
校は勉強する場所なんだから見た目はなんだ
っていいはずだ。仕事だって、業務に支障がな
ければ恰好は関係ない。そりゃそうだ。

日本で常識とされることが、世界的な視野
で見ると78億分の1億の常識でしかない。も
ちろん日本にもたくさんの誇れる常識があ
る。トイレを綺麗に使う。そこら中にゴミを捨
てない。兎に角、世界にはいろんな常識があ
って面白いし、時にはその考え方のシンプルさ、
人間味に「もっと自分に素直でいいんだ」って
思えたりする。早く外国に行って、色んな常識
に触れたい。

～お坊さんの書棚～

『生き物の死にざま』

著：稲垣栄洋 発行：草思社

私たちの身近にいる生き物や名前をよく知っ
ている生き物が、どのようにその“いのち”を終えて
ゆくのか、これまで気にしたことはあったでしょ
うか。家族、友人、親しい人の最後の姿を見舞い
見届けたことはあるが、他の生き物のことは知ら
ない、知ろうともしなかったと気づかせてくれる
のが、ご紹介する『生き物の死にざま』という本
です。

本書は、身近にいる昆虫、食卓にも並ぶような
鳥や魚、TVで観たことのあるような動物が、どの
ように死を迎えてゆくのか、エッセイの様式で書
かれてあります。

私が気になったのは、夏場、私たちの住む家に血
を吸うためにやって来るアカイエカ（赤家蚊）の章
です。蚊と言えば、“血を吸う”イメージがありますが、
普段は花の蜜や植物の汁を吸って、血を吸うの
はメスの蚊だけだそうです。そのメスの蚊が私た
ちの血を吸うために家にやって来るのには特別な
理由がありました。

妊娠したメスの蚊は、お腹の中の卵、新しい
“いのち”を養うためには、植物の栄養だけでは
足りず、動物や人間の血液を吸わなければなら
ないからでした。

私はそのようなことも知らず、蚊取り線香を
焚いて、血を吸われたなら、腹いせに手ではたい
てしまう始末です。私には、目の前にプーンと飛
ぶ一匹の蚊が、我が子のために命をかけている
母親の姿には見えていませんでした。

セミ、ネズミ、ニワ
トリから、ウミガメ、
サケ、ゾウにいたるま
で、たくさんの生き物
の姿が短編で書かれ
ています。興味のある
生き物から読み始め
ることもできる、おす
すめの一冊です。

